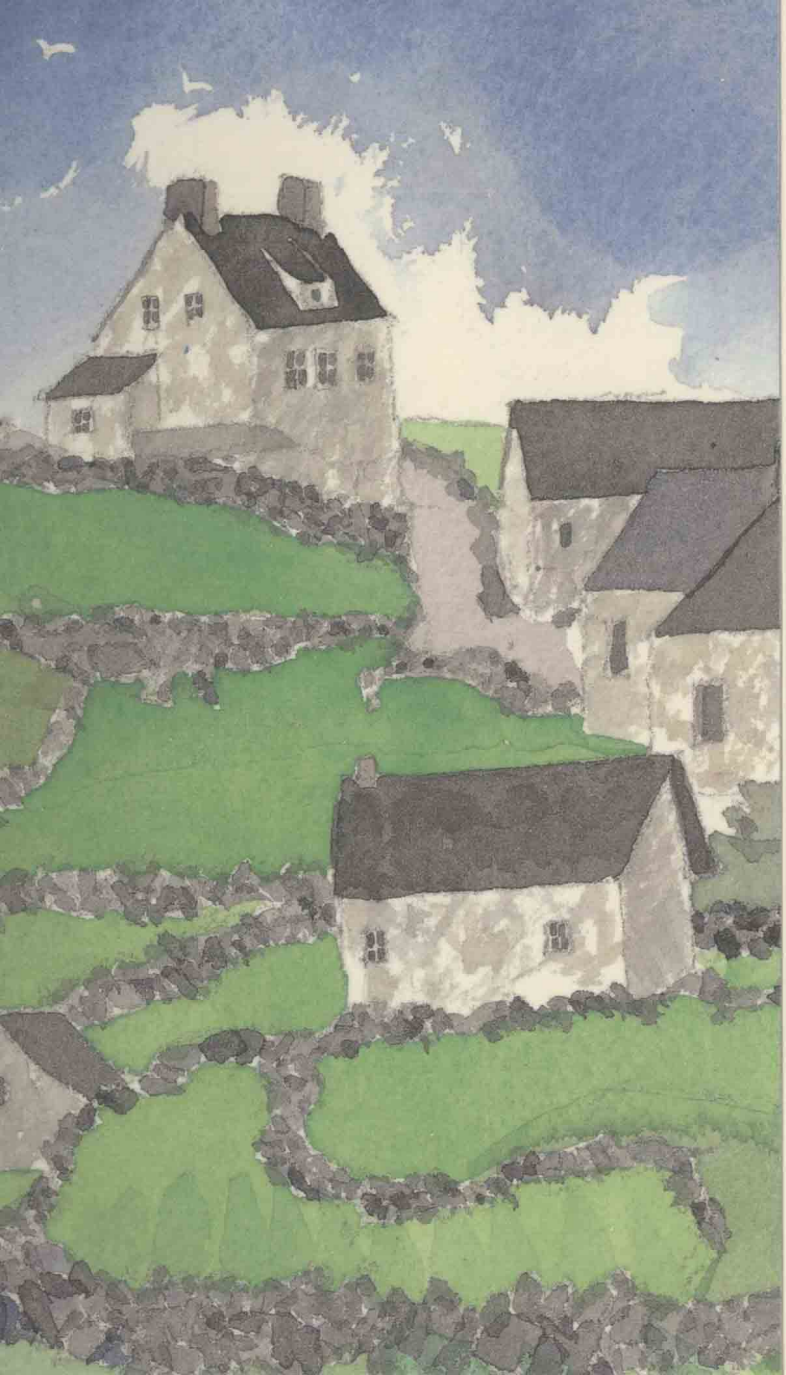
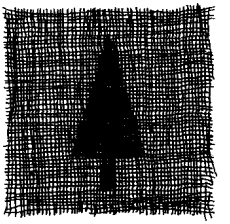


からだの発見

からだの発見



からだの発見 〈新・ちくま文学の森8〉

一九九五年四月二十四日　第一刷発行

編　者　鶴見俊輔（つるみ・しゅんすけ）
　　安野光雅（あんの・みつまさ）
　　森毅（もり・つよし）
　　井上ひさし（いのうえ・ひさし）
　　池内紀（いけうち・おさむ）

発行者　森本政彦

発行所　株式会社　筑摩書房
　　東京都台東区蔵前二―五―三　〒一一一
　　振替〇〇一六〇―八―四一二三

装　本　安野光雅
印刷所　三松堂印刷
製本所　鈴木製本所

乱丁・落丁本の場合は、御面倒ですが左記に御送付下さい。送料小社負担にてお取替致します。ご注文・お問い合わせも左記へお願いします。
〒三三一　大宮市櫛引町二―六〇四　筑摩書房サービスセンター　TEL〇四八―六五一―〇〇五三

©S. TSURUMI M. ANNO T. MORI H. INOUE
O. IKEUCHI 1995 Printed in Japan

ISBN4-480-10128-4 C0393

目次

▲

？……堀辰雄……6

▲

牧神の春……中井英夫……9

ある学会報告……カフカ　池内紀・訳……25

ある海水浴客の冒険……カルヴィーノ　和田忠彦・訳……43

女房を寝とられた二つの肉体……エーメ　江口清・訳……61

▲

眼玉／首と脚……柴田宵曲……83

刺青の話……岡本綺堂……93

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.c

パーカーの背中……オコナー　須山静夫・訳……111
欲望と黒人マッサージ師……テネシー・ウィリアムズ　志村正雄・訳……151
笞刑……金東仁　長璋吉・訳……167
ねむい……チェーホフ　神西清・訳……197
そんなこたないす……ラングストン・ヒューズ　木島始・訳……211
便利な治療……ボンテンペルリ　岩崎純孝・訳……223
酒虫……芥川龍之介……237
ヴァルドマル氏の病症の真相……ポー　富士川義之・訳……253

卒啄（そったく）……幸田文……271
苺（いちご）の季節……コールドウェル　横尾定理・訳……281
二世の縁（えにし）　拾遺……円地文子……289
ホーデン侍従（じじゅう）……尾崎士郎……317
青塚氏の話……谷崎潤一郎……349
自分のなかの他人　解説にかえて……池内紀……404

からだの発見

堀辰雄

?

ある朝、僕が目をさましてびつくりしたことには、僕がやつと名刺の大きさぐらゐにちぢまつてゐるのである。ひよつとしたらこれが僕のほんとの姿ではないのか、そしていつもは人間だと云ふ意識があるのであのやうに一人前の大きさに膨らんでゐるのではないかと思つた。僕はその朝はふしぎにも自分が人間だと云ふ意識が持てなかつたのである。それなのに時計が八時を打つのを聞くと、僕は何時ものやうに学校へ行かなければならないと考へた。習慣といふものは可笑しいものである。しかたなしに僕はオモチヤの小さいオオトバイに乗つて出掛けることにした。戸外はどういふ不思議なこともよく似合

堀辰雄（一九〇四―一九五三）。大正十五年「驢馬」第六号に「セルロイドなのかしら」として発表。のちに「?」と改題。

つてしまふやうなすばらしいお天気だつた。風と光線とがすてきによくまざりあつてゐた。僕は、煙草がひどく吹かしたくなつてやつとこさ片手でマツチをすつた。するとその時、僕のオオトバイは一人のお嬢さんをうしろから追ひ抜かうとしてゐた。僕がラツパを鳴らさうとして、手からマツチを棄てると、なんといふことだ。そのお嬢さんの肩の上に、そのまだ火のついてゐるマツチが飛んで行つてしまつた。こいつはあやまつて来なくちやならん、さう思つて僕が急いでオオトバイから飛び降りて走つて行つて見ると、これはしたり、そのお嬢さんはセルロイドのお人形さんのやうにぼうぼうと音を立てて燃えてゐるのである。

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.c

牧神の春

中井英夫

中井英夫（なかい ひでお）　一九二二（大正一一）―一九九三（平成五）　東大言語学科中退後、出版社に勤務。短歌雑誌の編集長として戦後の短歌界に大きく貢献、寺山修司をはじめとする俊英を世に送り出した。その後、小説に転じ「虚無への供物」で一部の注目をあびる。幻想的な作風によって特異な文学的世界をつくり上げた。「牧神の春」は昭和四六年「太陽」に発表。

なにしろ、そのころ貴の考えることといったら、役立たずという言葉そのもので、そのくせ一度それにとりつかれると、いつまでも抜け出せないで堂々めぐりをするというふうだった。たとえばいまノートへ書いたばかりの文字に吸取紙をあてたとき、その瞬間にひょいと身を移す文字の形態というものが、どうにも気になってならない。ノートから離れて吸取紙に移るあいだに、あいつはまるでサーカスのぶらんこ乗りといった要領で、かるがると体をひねって裏返しになるのだろうか。一ミクロンほどもない空間での曲芸を、貴はどうかして覗きみたいと希った。逆しまにぶらさがりながら、文字はそのとき束の間のべっかんこうをするかも知れないではないか。

あるいは一組のとらんぷの中で、スペエドの3はスペエドの2について、いったいどう思っているのだろうかと考え、たぶん、なんとも思っちゃいやしないんだと行き当ると、さながら自分が無視されでもしたようにはかない気がする。胸飾りをいっぱいつけたキングやジャックの札になりたいというのではない、いちばん地味な2だというのに、それでも皆はとらんぷの表面の、白く磨かれた光沢のように、よそよそしくそっぽを向くのだろうか。

——プシュウドモナス・デスモリチカ。

――プシュウドモナス・デスモリチカ。
呪文のように唱えていたそれが、そうだ、石油を喰うという微生物の名だったと思い出すと、たちまち貴の眼前いっぱいに青金色の彩光を揺らしている油層がひろがり、その中で蠢き群生するかれらの生態が、顕微鏡を覗きでもしたようにつぶさに映じた。
――おれは早く土星に行かなくちゃ。
その日、街を歩きながら、貴は唐突にそう思った。埃りっぽい風の吹きすぎる、春の昼なかのせいだったかも知れない。貴にとって、春はいつでも汚れていた。桜はすべて白い造花の列だった。
――こんなところでぐずぐずしてちゃいけないんだ。土星への旅。それにしてもあの土星の環ってのは、夜には色さまざまに映り輝いて、壮大な光の饗宴という趣きだろうけど、昼間見たらごちゃごちゃした土塊で、さぞきたならしいこったろうな。
そして、ちょうどそのときであった。なんの気もなしに頭へ手をやって、初めて触れたのがその角だった。まさかとは思ったのだが、たしかに瘤などではない、異様に尖った二つの隆起が、額のすぐ上に感じられた。同時に全身、とりわけ下半身のほうに音を立てるほどの勢いで体毛の伸び出すのが判った。春の街なかで、何かとんでもない変身が起りかけているらしい。髪も髯も、前から長くのばしているんだし、人眼に立つとは思えないけれども、貴はあわてて行きずりのメンズウエアの店の前で立止ると、仄暗いウインドをのぞきこんだ。

みかけだけは平凡な若者がそこに映っていた。しかし、よくよく眺めると、長髪も頬髯も家を出るときよりはるかに伸びて縮れ、額のところへもう一度手をやってみると、まぎれもない二本の角が生えかけていた。顔つきまでがどことなく山羊の精めいてきているらしい。びらびらのついたインディアンコートの下に白のデニム、モカシンを穿いたいつものとおりのオレに、いったい何が起ったというのだろう。なんだって急に角なんかが生えてきたのか、そして、なぜオレにはこれが角だという確信があり、おまけに前からそれが判ってでもいたように、それほどうろたえもしないのか、貴にはむしろそのことのほうが不思議に思えた。

ウインドの中に立ちつくす黒い影のうしろには、こともなく明るい市街が拡がり、疾走する車も、行き交う通行人も、まだこちらに気をとめる気配はない。貴はそのままじっとして変身の終るのを待った。ありがたいことに、角はもうこれ以上伸びないらしい。ただモカシンの中で足の先が堅くなり、蹄の割れてゆく感じが異様だった。それに、何より尻の合間に短い尻尾が生え、そのむず痒い感覚といったらない。コートを着ているからいいようなものの、そうでなければずいぶん恥ずかしい思いをしなければならないだろう。どこか喫茶店にでも飛びこんで、トイレでどんな具合か調べたい気もしたが、どっちにしろみっともないことに変りはないんだと、貴はようやく我慢した。

変身はどうやら完了したらしい。サチュロスというのか、それともフォーヌとかパンとか呼ばれる、山羊の蹄と角とを持った、あの毛むくじゃらな牧神に自分がなってしまったこと

を、まだ誰も気がついていないんだと思うと、ちょっぴり嬉しいような、それでいてひどくみじめなような、妙な気分だった。こんなことになったのは、苜蓿を食べすぎた山羊のように、あまりに雑多な理念をむさぼりすぎたせいだろうか。プシュウドモナス・デスモリチカなんて変な呪文を、やたら唱えなければよかったんだ。それにしても、このまんま街の中にいるのはまずいと貴は思った。牧神は当然、森とか沼の畔とか、放たれた空間を自由に遊び回るべきだろう。それに、躰が変化したせいか、窮屈な衣服を脱ぎすてて、思うさま飛んだり跳ねたりしたい衝動がさっきからしきりとする。蹄のままの趾で靴を穿いて、うまく歩けるかどうか心配だったが、貴はそろりと一歩を踏み出し、痛くないと知ると急に元気になって、駆けるように駅へ向った。

*

……決闘・金狼・愛餐・緑盲・幻日・袋小路・紫水晶・歪景鏡・贋法王・挽歌集・首天使・三角帆・宝石筐・帰休兵・火喰鳥・花火師・水蛇類・送風塔・冷水瓶・小林檎・逃亡兵・人像柱・水飼い場・聖木曜日・耳付の壺・神怒宣告・囚人名簿・女曲馬師・舌ひらめ・放浪楽人・夜見の司・草売り女・二人椅子・表情喪失症・とらんぷ屋・埃及の舞姫・西班牙の法官・ボンボン容器・貴族制反対者・土耳古スリッパ・仏蘭西の古金貨・露西亜の四輪馬車等々……

さっきから耳の中で唸りをあげているのは、およそ脈絡もない言葉の羅列で、それがふら

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com